

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 神奈川県横浜市戸塚区小雀町777番地
管理機関名 学校法人 公文学園
代表者名 理事長 公文 倫子

平成30年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成30年4月2日(契約締結日) ~平成31年3月29日

2 指定校名

学校名 公文国際学園中等部・高等部

学校長名 梶原 晃

3 研究開発名

世界へ飛躍する為の総合学習と模擬国連を軸としたグローバルリーダー育成

4 研究開発概要

全員を対象とした総合学習など(高1「Project Studies」「Global Issues」、高2「Liberal arts Education in English (LEE)」)による基礎力養成と、希望者を対象とした模擬国連を軸とした発展的教育活動(「海外模擬国連」「校内模擬国連」など)を有機的に組み合わせることにより、グローバル教育の更なる充実を図る。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程												
	月	月	月	月	月	9月	月	月	月	月	月	3月	
運営指導委員会						開催							開催

(2) 実績の説明

運営指導委員会を9月と3月に実施し、委員の先生方4名から改善点の指摘やアドバイスを多数いただき、その後の取り組みに役立てた。

6 研究開発の実績

(1) 実施日程

課題項目	実施期間(平成30年4月2日～平成31年3月29日)											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
Global Issues	授業	授業	授業	授業		授業	授業	授業	授業	授業	授業	発表
Intensive Seminar		希望調査	実施	実施			実施	実施	実施	実施	実施	
校内模擬国連 MUNK MUNK International		実行委員立上	募集1次	勉強会		D R 添削		募集2次	勉強会	D R 添削	実施	実施
海外模擬国連参加		募集	選抜	事前学習		事前学習	事前学習	会議本番	事前学習	会議本番	振り返り	発表
外部団体へのプレゼン										準備	準備	発表
海外高校等との連携強化					現地訪問交流							
Project Studies	授業	研究課題決定	授業	授業		中間発表会	表現祭展示				成果発表会	論文提出
ベトナムFW	事前学習	事前学習	事前学習	事前学習	実施	レポート作成	表現祭展示		論文提出			成果発表会
LEE	事前学習	事前学習	事前学習	事前学習		実施	レポート作成		プレゼン			成果発表会

(2) 実績の説明

Global Issues の実施

昨年度同様、高校1年生全員(149名)を対象に、Global Issues の授業を実施した。Global Issues は、移民・難民・医療・エネルギーなど、地球規模での課題を大きな視点で捉えると共に、そこから顧みて身近な問題に目を向け、自分たちにできることを考えて行動に移していくことを目指すものである。そのために、授業ではグループでの討論や発表の機会を増やししながら、9月のスタディウィークにはテーマ別のフィールドワークを実施するなど、校外へも活動の幅を広げた。指導の核となる情報科および社会科の教員とSGH 特任教員(ネイティブ教員)がチームを組んで授業にあたった。

Project Studies の実施

例年通り、高校1年生全員が、それぞれのテーマを設定して個人課題研究に取り組んだ。クラスごとに3名の担当教員がチームを組んで、生徒の指導にあたった。昨年度に引き続き、北里大学と早稲田大学に連携をお願いし、16名の生徒たちが両大学の先生方の指導・助言を受けた。

9月下旬に中間発表会を行い、互いの研究の途中経過を披露し合った。2月には、ポスターセッション形式での最終成果発表会を開催するとともに、全員が各々の研究成果を論文にまとめた。

Intensive Seminar の実施

放課後を利用して、中3～高2の希望者を対象に、Intensive Seminar と題した集中講座を行った。
講座内容・講師・日程・参加人数は以下の通りである。

<前期>

「未来をつかむスタディーズ」(全5回) NPO 法人 未来をつかむスタディーズ 43名参加

講師: 「SDGs ぼくらの世界」 河内智之氏

「ガーナ」 矢野デイビット氏

「異文化理解ワークとカンボジアの大学」 有澤和歌子氏

「慶応大学 SFC 学生交流とコンゴの教育支援」(1) 長谷部葉子氏

「慶応大学 SFC 学生交流とコンゴの教育支援」(2) 長谷部葉子氏

<後期>

「発展途上国の教育」朝日新聞記者 藤谷健氏 10名参加

「発展途上国の識字支援」「国際教育協力とキャリア形成」

ユネスコ・アジア文化センター教育協力部 若山洋子氏 10名参加

「相手に伝える力をつけるために」 日本経済大学 望月洋佑氏 11名参加

LEE (Liberal arts Education in English) の実施

1. 実施時期 海外コース) 2018年9月22日～9月29日・7泊8日

国内コース) 2018年9月24日～9月28日・4泊5日

2. コース・訪問大学・参加人数(学年は全て高校2年生)

1) シンガポール: Nanyang Technological University 47名

2) ニュージーランド: Massey University 90名

3) 日本: 立命館アジア太平洋大学(APU) 37名

LEE(Liberal arts Education in English)は、2015年度から始まった高等部2年の総合学習である。訪れた国や地域の文化を学び、その地に学びに来ている多様な文化をもつ大学生との交流を通して、異なる文化の人たちの考え方を受け入れる力を身につけることを目的としている。その手段として英語を使用する。また、公文国際学園で行う総合学習の集大成として機能させることも目標にしている。今年度は、昨年度の反省を踏まえて、現地学生とより多くの議論や交流ができるよう、企画段階から工夫を重ねた。事前学習の時間確保や、相手校との目的意識の共有など、解決すべき課題は多いが、そうした困難に取り組むこと過程もまた、LEEの活動の一環なのだを認識している。3年間の蓄積を生かして、次年度には更に充実したものになるよう尽力したい。

海外高校との連携強化

8月7日から26日まで、オーストラリアのロビーナ高校での3週間にわたる語学研修・学校交流が実施された。中3・高1・高2の希望者21名が参加し、ホームステイをしながら、現地の高校生との交流を通じて異文化への理解を深め、英語力を磨いた。

海外模擬国連への参加

<シンガポール模擬国連>

11月18日から11月23日まで、シンガポールで開催された模擬国連大会に本校代表生徒17名(中3・高1・高2)が参加した。昨年度は本校生徒の中から副議長が出たが、今年度は本校生徒が議長を務め、会議の運営や進行における貢献度が一層強まった。委員会においてメインサブミッター(主提案者)として草案をまとめる中心的役割を果たした生徒もあり、会議をリードする重要な発言が増え、これまでの蓄積を踏まえた着実な質の向上が見られた。

<ハーグ模擬国連(THIMUN)>

1月27日から2月2日まで、オランダ・ハーグで開催されたTHIMUNに今年も本校代表生徒12名(高1・高2)が参加した。人権問題、AI、国際司法裁判所の権限強化などの議題に関して、各々の生徒が積極的に発言し、本校生徒全員の5日間の発言合計は128回にも及び、会議全体の活性化に大いに貢献した。

校内模擬国連(MUNK・MUNK International)の開催

2月11日、第14回目となる模擬国連(通称:「MUNK(ムンク)」...Model United Nations of Kumon)が本校で開催された。<3月17日には、同じテーマで、全てのプログラムを英語のみで実施する「MUNK International」(Model United Nations of Kumon International)も開催。>

校内模擬国連(MUNK・MUNK International)実施概要

【開催日時】 2019年2月11日 MUNK / 3月17日 MUNK International

【主催】 公文国際学園(生徒有志による実行委員会運営)

【参加生徒数】 MUNK 251名(本校生徒207名・他校生徒44名)

MUNK International 156名(本校生徒129名・他校生徒27名)

【招待校】 横浜国際高校/横浜商業高校/清教学園中・高校/京都大谷高校/横浜清風高校
大妻中野中・高校/茗溪学園高校/クラーク記念国際高校/栃木県立佐野高校
不二聖心女子学院中・高校/仙台二華高校/横浜市立東高校/清泉女学院中・高校
立命館宇治高校/浅野高校/洗足学園高校/昭和中・高校/朝日塾中等教育学校
United World College Karuizawa International School

【使用言語】 MUNK 議論は日本語、議事進行は英語。

MUNK International 議論、議事進行などすべての場面において英語を使用。

Global Studies の開講

高3の自由選択科目として「Global Studies」の授業を開講した。選択者数は12名で、地球規模の諸課題について、リサーチ、ディスカッション、プレゼンテーション、レポート等を全て英語で行うオールイングリッシュの学習活動を実施した。

ベトナムでのフィールドワークの実施

2018年8月19日から24日まで、5泊6日のベトナムフィールドワークを実施した。訪問地はハノイ市周辺及びホアビン省で、高校2年生24名が参加した。昨年に引き続き、本校SGH研究課題である「発展途上国での教育支援」を活動のテーマとして、アジア地域の発展途上・中進国であるベトナム訪問に至った。現地ではベトナムの教育事情について、自分たちの目で見て、現地の人々と関わり合いながら学ぶことで、どんな支援が必要なのかを取材、分析し、今自分たちに何ができるのかを考えた。

外部団体へのプレゼンテーション

3月11日、東京・品川の公文教育研究会本社会議室において、本校の高1「Global Issues」の代表生徒グループおよび高2「ベトナムフィールドワーク」の代表生徒グループが、同社社員の方々に対して研究成果の報告プレゼンテーションを行った。社員の方々からは、その場で直接フィードバックをいただき、生徒たちへの良い刺激となった。

アジア高校生架け橋プロジェクトの留学生受け入れ

文部科学省からの要請に応じて、アジア高校生架け橋プロジェクトの留学生受け入れを行った。9月から2月までの半年間の間、本校では7名の留学生を受け入れた。出身国の内訳は中国2名、タイ2名、モンゴル1名、スリランカ1名、ミャンマー1名である。高1・高2の各クラスに所属するとともに、寮生活にも加わり、日常生活レベルでの国際交流に努めた。

SGH 生徒交流会の開催

5月12日、横浜国際高校にて、近隣のSGHの相互交流会が行われた。本校からは国際理解教育委員会の生徒8名が参加した。3校（本校・横浜国際高校・法政国際高校）のSGH生徒が集まり、各々の活動状況報告とグループ討議を行い交流を深めた。7月15日には本校を会場として第2回の交流会を実施し、総勢24名が参加し、様々なテーマについて討議を行った。12月21日には法政国際高校を会場として第3回交流会が開催され、本校からは4名の生徒が参加した。

SGH 研究発表会の開催

本校では毎年、年度末の3月中旬に「国際理解 DAYS」と銘打って、1年間の国際理解教育活動と総合学習の代表発表会を実施している。中1の総合学習である「インタレストスタディーズ」、中2・中3の総合学習である「日本文化体験」、高1の「Project Studies」、高2の「LEE」など、各学年の必修プログラムが一方の軸となる。もう一方の軸は、海外模擬国連、校内模擬国連、ベトナムフィールドワークなど、希望者を対象とした選択プログラムである。いわば、本校の1年間の特別教育活動の集大成をまとめた発表会であると言える。

今年度も昨年度までと同様、3月19日に、この発表会を「SGH 研究発表会」として公開した。運営指導委員の先生方にも御覧いただき、講評を受けた。

7 目標の進捗状況、成果、評価

2016年度から必修化した高1のGlobal Issuesでは、全生徒がグローバルな課題について考える機会を増やし、課題研究の裾野を広げ、SGHとしての活動をさらに幅広く発展させていくという目標を、ある程度達成できたのではないかと自負している。

Intensive Seminarでは、昨年度同様、講師の先生方をお願いして、生徒たちが能動的に活動できるようなアクティビティやワークショップを、可能な限り講座の中に盛り込んでいただいた。その効果もあって、事後のふりかえりアンケートでは生徒の満足度は9割を超え、答えのない問題に自分たちの力で取り組むことの難しさと、それゆえの充実感、自分たちの力で少しでもできることをやっていくことの重要性などを実感したという感想が多かった。

例年実施しているProject Studiesについては、一定の評価は得ているものの、生徒や担当教員に対して行った聴き取り調査では、まだまだ各々の研究テーマについての掘り下げが足りないという声が多い。「よくできた調べ学習」の域から「自らの行動を通じて課題設定・仮説・検証の構築を論理的かつ実証的に行う探究学習」のレベルへと引き上げていけるよう、現在の方法論の見直しを図りたいところである。

シンガポール模擬国連では本校代表生徒が議長を務め、全体の運営に多大なる貢献を見せた。ハーク模擬国連においても、本校生徒全体で200回以上に及ぶ発言を行い、議論を活性化させた。

校内模擬国連については、昨年度同様、DR(決議草案)の内容チェックを念入りに行い、議論の精度を上げるための準備活動に時間をかけた。形式や運営形態自体は例年と変わらないが、内容の深さにおいては、従来以上のものになったのではないかと自負している。

4年目を迎えたLEE(Liberal arts Education in English)については、事後調査における生徒の満足度は概ね高かった。年を追って活動の質は向上しているものの、目標とすべきレベルには、未だ達していないと認識している。高2生全員を対象としたLEEは今後の本校の教育活動の中核の一つとなっていくべきものであり、通常の教科の授業や他の教育活動との有機的な連携を進めていく必要がある。今年度の反省をふまえ、更なる検討を進めたい。

同じく4年目を迎えたベトナムフィールドワークでは、昨年度の振り返りを踏まえて、現地での活動の充実度が更に向上した。事後に行った生徒発表では、活動内容の詳細な報告のみならず、前後のミーティングで時間をかけて深めた議論や思考の過程が強く反映されており、前年度からの継続の重みを感じられる。また、12月に東京国際フォーラムで行われたSGH全国高校生フォーラムでは、代表生徒4名が英語でのプレゼンテーションを行い、質疑応答も活発に行った。

SGH生徒交流会やSGH研究発表会の開催など、SGH指定を機に、外部へ向けての成果の普及や発信の機会も増えた。指定終了後も、外部発信や相互交流の試みを継続的に進めたい。

今年度初の試みとして行ったアジア高校生架け橋プロジェクトの留学生受け入れでは、中国・タイ・モンゴル・スリランカ・ミャンマーから計7名の留学生を迎えて、日常の学校生活レベルでの国際理解・交流の充実に努めた。

目標設定の実現に関しては、概ねロードマップの通りに推移している。CEFRのB1/B2レベルの割合は、2年前までは全員が受験しているTOEICの結果で算出してきたが、ReadingとListening

のみのテスト実施であり、Speaking と Writing のテストを行ってはいなかったため、昨年度より、4 技能測定を前提とした外部テスト（GTEC）への移行を行い、Speaking と Writing の評価の数値化も可能となった。

2016 年 9 月、本校は文部科学省より SGH 中間評価を受けた。「生徒全員が参加する授業の開発」においては高い評価を得たものの、その質の向上、教員間の温度差の改善、学校組織全体を挙げての体制づくりなどが、今後の課題として指摘された。それを受けて、いくつかの改善策を講じ、それらを現在も継続している。

まず、授業の質の向上である。SGH 活動に直接関わる授業のみならず、全教科の授業において、生徒の主体的な学びを促すアクティブラーニングを推進し、研究開発部主催の授業検討会の回数を増やし、教科や学年の枠を超えて、多くの教職員が優れた実践例を共有できるように尽力した。また、個々の教職員のスキルアップのための研修制度を整備し、多様な校外研修に参加しやすくするために、研修への支援を拡充した。

教職員の温度差の改善については、不定期ではあるが「拡大 SGH 委員会」を開催し、従来は SGH 委員会内にとどまっていた SGH 運営や SGH 活動に関わる議論を、より開かれた形で、多くの教職員が話し合う場を設定した。また、組織体制としては、SGH 委員会を校務分掌に準ずる機関とし、全体の中での位置づけを明確に示した。

各々の活動については、その都度、生徒へのアンケート等による振り返りを行い、成果を検証している。年を重ねる毎に、少しずつではあるが、活動を通じて自らの成長を実感したと答える生徒の割合が増加している。

2016 年度から開講した高 3 自由選択科目の「Global Studies」を選択した生徒たちが、毎年高い進路実績を残しているのは、本校での国際理解教育活動で培った知識・理解・思考・表現力の上に立った発展的な学習活動が功を奏した結果であると言える。SGH 指定終了後も、生徒全員が取り組む教育活動を土台としながら、希望者が個々の可能性を最大限に伸ばしていくことができるような、発展的な教育活動の整備に尽力していきたい。

8 5年間の研究開発を終えて

SGH 指定を受ける前から、本校ではすでに多彩な国際理解教育プログラムが展開されていた。15年におよぶ実績を持つ海外模擬国連への参加や校内模擬国連（MUNK および MUNK international）の企画運営、海外語学研修や British Hills での国内英語研修、国際理解教育委員会のフェアトレード活動や国際理解 days での成果発表など、本校の国際理解教育活動においては、生徒の主体性を重んじる希望者参加の形が主軸であったと言える。

一方で、2015年度から始まった高2の総合学習である LEE(Liberal arts Education in English)や、SGH 指定を機に導入された高1の Global Issues (GI) は、生徒全員を対象としたプログラムであり、本校の国際理解教育の裾野を広げる役割を果たした。さらに SGH 指定を契機として、高2のベトナムフィールドワークや高3の Global Studies、さらに学年の枠を超えた Intensive Seminar などのオプショナル・プログラムも追加された。また、SGH 最終年度となる 2018 年度には、アジア高校生架け橋プロジェクトの留学生を7名受け入れ、日常の学校生活レベルでの相互交流に努めた。

高大接続については、高1の総合学習である Project Studies を核として、北里大学と早稲田大学に連携を求め、生徒の研究テーマに応じた指導・助言をいただいた。また、早稲田大学とは単位履修制度においても連携し、自由選択の学校外学修という形で、生徒の関心に応じた大学レベルの学びを提供してもらっている。学校外学修の単位は、当該生徒が卒業後に早稲田大学へ進学した場合には、大学の取得単位として認定されることになっている。

SGH 指定後の5年間における生徒の変化について、最も目立ったのはプレゼンテーション能力の伸張である。これは、SGH 指定によって、日本語・英語を問わず、対外的な活動の機会が増大したことに起因すると考えられる。模擬国連での発言回数の飛躍的な増加や、議長・副議長・メインサブミッター等の重要な役割を果たす生徒が増えたこと、SGH 全国フォーラムや公文教育研究会での成果発表など、一般の人々を前にしたプレゼンテーションでも、しっかりとした発表ができる生徒が増えたことを実感している。

一方で、表現技術の伸張に比べ、思考の深さや創造性が十分に育っているかという点については課題が残る。次々と訪れる発表の機会をこなしていく過程において、その場をうまく乗り切ることで満足してしまう生徒も、少なからずいるように見受けられるのである。自己省察も含めた深い思考力と、それに基づく豊かな創造力の育成が、今後の課題であろう。

教師の変化については、中間評価において指摘を受けた通り、かなりの個人差があったのは事実である。積極的に活動に関わった教員たちにとっては、生徒に対する指導力のみならず、企画力・運営力・交渉力・調整力など、教師としての資質にとどまらない、学校の外の世界でも汎用可能な社会人としてのスキルを大きく向上させる契機となった。惜しむらくは、それが現段階では個々人の成長の域にとどまり、組織全体の成長にまで十分に広がり切れていないことだろう。これは SGH 指定終了後も、本校が見据えていかなばならない課題であると思われる。

授業においては、グループワークやジグソー法、ディスカッションやディベートなど、生徒のアウトプットを引き出す工夫を凝らす教員が以前よりも増えた。授業参観後の保護者の感想には、そうした授業に対する肯定的な評価が数多く記されている。

SGH 指定に伴う研究開発・実践の過程で、本校では従来の教育活動に加えて、更に多くの国際理解教育プログラムを立ち上げた。先述したように、それらは本校の国際理解教育を大きく前進させる契機となったが、SGH 指定終了にあたって、やや膨らませすぎた感のある活動全体の分量や、他の教育活動とのバランスについては、見直す時期に来ているとも思われる。端的に言えば、多様な活動の量的拡大を求めてきた時期を過ぎ、それぞれの活動の質的充実を目指す時期に来ていると感じられるのである。

以上のような状況を鑑み、SGH 指定期間満了に伴う諸活動の見直しの一環として、2019 年度以降、高 1 の「Global Issues (GI)」を思い切って廃止することにした。本校の高 1 には、既に総合学習としての「Project Studies (PS)」がある上に、必修科目の履修が多く、全てを十分にやり切るには無理があると判断したためである。また、GI で提示されていた国際的な課題に対する問題意識については、総合学習や各教科の日常の学習活動の中に組み込んでいくことが十分可能であるという判断もあった。そういう意味では、廃止というよりは、日常の教育活動への発展的昇華と言えるかもしれない。

他の国際理解教育活動については、SGH 指定終了後も継続し、更なる充実を図っていく所存である。本校の教育目標には「国際社会で活躍できる広い視野と行動力を持つ人間の育成」が明示されている。それは SGH という肩書きが外れても決して揺らぐことのない建学の理念である。SGH 指定の 5 年間の経験を糧に、本校における国際理解教育も含めた教育活動全体の更なる質の向上を目指したい。

なお、本校では、SGH 指定以前から、校務分掌としての国際部が独立して存在し、多様な国際理解教育プログラムの企画・運営の中心的役割を果たしてきた。来年度以降は、さらに国際部の下部組織として、Kumon Global Center (KGC)を発足させる。これは、特に生徒の海外進学に向けての指導体制作りを担う部署であり、より幅広く、国際的な視野で進路保障を行っていかうというものである。こうした組織改革も含めて、管理機関と人材面・財政面における連携を緊密にとりながら、教育活動全体を下支えする基盤固めにも尽力していきたい。